

第八回李登輝学校研修団レポート

李登輝校長と

「千の風になつて」を大合唱

青年部初代部長

早川 友久
はやかわ ともひさ



「霊安故郷」碑に拝礼する竹市団長

今回で八回目となる台湾李登輝学校

研修団は十一月三十日から十二月四日の日程で開催。団長を務めるのは、通算七回目の参加という滋賀県の竹市敬二氏。帝国海軍出身で八十一歳の竹市さんは李登輝校長からも「竹市さん、若いね」とお褒めにあずかったエピソードを持つ。副団長は前回は副団長を務めた、通算五回参加の高松好夫氏。

今回の参加者は十五名で、前回までと比べるとやや小規模。台湾は年明けから立法委員選挙、総統選挙と続き、日程調整の点から来年上半年期の開催は難しく、この時期の開催になった次第だ。「忙しい年の瀬では参加できない」とお叱りをいただいた方々には改めてお詫び申し上げたい。

【第一日・十一月三十日 台中】

夕方、台湾桃園国際空港に到着した一行はそのままバスで台中市へ移動。

台中市在住の李登輝学校卒業生に迎えられ、「活力珈琲館」で夕食を兼ねて野外研修を行った。ここは台湾では知る人ぞ知るカフェ。一見、クラシックのかかる「名曲喫茶」の印象なのだが、オーナーの高さんが見せてくれたアルバムには、独立派大物の顔がズラリ。そう、ここは台湾派が集まる「サロン」そして親しまれているのだ。

お腹を空かせた一行に振舞われたのは「鉄路弁当（駅弁）」。台湾の駅弁は日本時代からの歴史があり、醤油で甘辛く煮付けられた排骨飯に研修生も舌

鼓。そこへ台中に滞在中の黄文雄・本会常務理事が激励のため、タクシーを飛ばして駆けつけて下さった。突然のゲスト登場に一行からは大きな拍手。前回このカフェを訪ねた際は休みだったという黄先生も、このカフェのアルバムに納まったようだ。

【第二日・十二月一日 台中／彰化】

本日最初の野外研修地は彰化市にある台湾鉄路局・彰化車庫。我々を歓迎して下さいしたのは、彰化機関区の段長（彰化地区の最高責任者）を務める宋鴻康さん。宋さんはたゞいま日本語勉強中。照れながらも簡単な挨拶を日本語でしていただき、研修団から大きな拍手が。その後の通訳には、李登輝学校卒業生で、毎回お世話になっているお馴染みの李清興さんをお願いした。

彰化車庫の目玉は「扇形車庫」。日本時代の大正十一年（一九二二年）、蒸気機関車の時代に先頭車両のメンテナンス基地として建設され、その名が

示すように、扇を開いた形に似ているのが特徴だ。当時、五カ所に設置された扇形車庫も現存するのは彰化のみ。現在は文化財として保護されている。

驚いたのは我々のために、一台の車両をわざわざ動かしてくれたこと。実際に扇形車庫が使われている姿を目の当たりにし、研修生からは「特に鉄道ファンというわけではないのに、こんなに楽しめるなんて」と感激の声が。

台中市に戻った一行は、続いて台中放送局へ。開局は日本時代の昭和十年（一九三五年）。修復されクリーム色に塗られた建物も現役なら、中身もラジオ局として使われている現役。整備された中庭には日本時代の美しい石灯籠



活力珈琲館に駆けつけた黄文雄常務理事（11月30日）



彰化車庫の扇形車庫の前で（12月1日）



林明德先生（12月2日）



馬薩道輝先生（12月2日）

を椰子の木が見下ろしている。

昼食後に訪れたのは「台湾の靖国神社」と称される宝覺禪寺。境内には大東亜戦争で日本人と共に散った台湾出身の兵隊さんを慰霊する、李登輝前總統の揮毫になる「靈安故郷」碑と、日本時代に台湾に埋葬されたものの、戦後長らく荒れ果てていた台湾北部と中部の日本人墓地などの遺骨をまとめて埋葬した「日本人遺骨安置所」も建てられている。研修団はどちらにも感謝をこめて献花し頭を垂れた。

続いての研修は台中公園。ここでは日本時代の台中神社を偲ぶことができ。倒されたまま放置された台中神社の鳥居を見学。ふと見ると、鳥居の傍

らにはプレートが立ち「日本時代の台中神社の鳥居」と説明が添えられている。そう言えば、この台中公園も戦後、「中山公園」（中山は孫文の号）と改称されたが、二〇〇〇年に市民の要望で名称を復活。日本時代の歴史を抹殺しようとした国民党だが、「歴史は歴史」と割り切った台湾人との相容れなさを見たような気がする。

台中での野外研修を終え、バスに乗り込んだ一行は一路、淡水へ。今回の宿泊および講義は従来の桃園・渴望学習センターではなく、李登輝学校のオフィスがある淡水で行われる。桃園は周囲から隔絶された研修地だったが、今回は夜市や台北市内にも出掛けて市

井の人々の暮らしを実感してもらおうという台湾側の粋な計らいだ。

淡水に到着した一行は、赤レンガの古跡が美しい「紅樓」で夕食。台中での研修と移動でやや疲れたのか、夜市もそこそこに投宿先へ。

【第三日・十二月二日 淡水】

ホテルから講義教室までは徒歩五分ほどの距離。李登輝学校本部が入る瀟洒なビルの一室だ。

講義は林明德先生（台湾師範大学教授）の「台湾主体性の追求」で幕開け。過去四百年の間、台湾の主人になることができなかった台湾人の悲哀とともに、「中国か台湾か」で揺れる台湾を守るためにはアイデンティティの確立が最重要であると断言した。

休憩時にはコーヒーや烏龍茶などが用意され、台湾側スタッフの気配りに感謝。研修生が講師の先生をコの字型に囲むように机が配置されているので、双方の距離が近く感じられ、質問

の手も活発に挙がっている。

午後は「原住民の発展」と題する馬薩道輝^{マサオ・ケイ}先生の講義だが、馬薩先生の美しい日本語には感動すら覚える。前回の研修の後、礼状を認めた筆者にいただいた返信も格調高い日本語で綴られており、思わず背筋が伸びた。

夕方からは最後の野外研修へ。来月に迫った立法委員選挙が二日前に告示されて初めての週末。そこかしこで選挙カーががり立て、幟がはためいている。その選挙演説会場を視察しようとして訪れたのは、台北県で立候補している莊孟學氏（台湾団結連盟）。この名前にピンと来る人も多いだろう。莊氏の前職は李登輝学校教育部長だ。馴染みの顔が駆け付けたことで緊張気味の莊氏の顔もいくぶん綻ぶ。研修生も台湾の選挙を実感できて満足そうだ。

【第四日・十二月三日 淡水】

今日の講義は李登輝前総統と台湾民主化をテーマにしたDVD『台湾民主

化之道』観賞でスタート。

続いて、郭生玉・李登輝学校教頭から歓迎の挨拶。引き続き黄昭堂・台湾独立建国連盟主席の講義へと突入。風雲急を告げてきた「立法委員選挙と総統選挙」をテーマに、黄主席は「国際法上、台湾が置かれた現状は歴史上今までなく、いわば判決を待っている状態。この現状を打破するにはさらに台湾人のアイデンティティを強化する必要がある」と喝破。

午後は、元東京新聞台北支局長の迫田勝敏^{たかつとし}先生の講義でスタート。「日本人の台湾生活経験」と題した講義は、台湾に魅せられたあまり退職後に住み着いてしまった迫田先生ならではの経験談を披露。「自分は台湾人」という確固たるアイデンティティを持った台湾人が飛躍的に増加した以上、台湾化の勢いは止まらないだろうとの分析は元新聞記者ならではの。

本日最後の講義は黃天麟先生（前総統府国策顧問）。財界の重鎮でもある

黄先生は相変わらず柔らかな物腰で難解な経済を解き明かしていく。経済だけの状態を見れば、台湾が中国に飲み込まれるのは時間の問題とする黄先生の講義に、危機感を感じた研修生から次々と手が挙がる。

濃密な一日を終えた研修生だが、なぜか外出しない。今宵はアジア五輪予選の決勝「日本VS台湾」の生中継があるのだ。途中リードされながらも凱歌を揚げた日本チームに、各部屋ではビールで乾杯。

【第五日・十二月四日 淡水】

あつという間の最終日。いよいよ校長でもある李登輝先生の講義である。



黄昭堂先生（12月3日）



迫田勝敏先生（12月3日）



黄天麟先生（12月3日）



研修生と一緒に「千の風になって」を熱唱された李登輝先生（12月4日）

午前十時、淡水河を望む大広間に颯爽と現れた李校長は、一行全員と握手してから講義開始。『文明の衝突』を著したサミュエル・ハンチントン氏が論じる「国家の民主化に加担した勢力が、後に民主化を妨げる勢力になる」という「ハンチントン現象」をとり上げ、台湾の民主化の停滞と今後の課題について話された。「民主化を成し遂げた国家の全てが自由を享受しているわけではない。むしろ後退し問題を抱えている国家が多い」とする李校長は、現在の台湾がまさに岐路に立っている」と指摘。今一度、台湾人は奮起しなければ民主化の後退に繋がってしまう、と危機感を表した。その後「最

高指導者の条件」として安倍首相退陣にも言及、質問にも丁寧な答えられて一時間の講義はあつという間に終了した（4頁参照）。

修業式では李校長自ら研修生一人ひとりに修了証書を手渡され、記念撮影。「続きは食事しながらおしゃべりしましょう」と、大テーブルに李校長を一同が囲んだ昼食会では、講義の続きのように研修生から質問が飛び、李校長も丁々発止と答えられて大盛り上がり。最高潮は、李校長が「一日中聞いている」という「千の風になって」を全員で大合唱。目を閉じて熱唱される李校長を囲み、今回も充実した李登輝学校研修団は幕を下した。